

江戸時代村落の両墓制史料(下)

——丹波桑田郡山国郷比賀江村——

竹 田 聴 洲

一八、年次未詳 最玄寺竜山ニ付某人留書

当山之儀者先年御檢地之砌、延宝七己未年除地相定。依之為報恩建立之。今改精養竜山、当山之可為中興者也。享保十六辛亥十月遷化。

○東照大権現曆代トキ 尊儀

一九、享保十九年五月 最玄寺月牌請取状(山国村比賀江 岡本久夫氏文書)

覚

合 廿五匁

右者御両親月牌料也。則受納祠堂帳面記置無退転毎月可相勤者也。

禪定庵現任

享保十九年寅五月 日

愚

門印

岡本理右衛門様

二〇、宝曆四年七月 岡本源治宛徳寿庵檀那惣代等諚状(山国村比賀江 岡本久夫氏文書)

江戸時代村落の両墓制史料

江戸時代村落の兩墓制史料

奉差上口上之覚

一、私共宿坊徳寿庵無住ニ付、兼帶寺役之儀、御本山より円徳寺へ被仰付候所、私共奉存候者、同村清光寺庵住へハ不被仰付、如何成意味合ニ御座候哉。殊ニ円徳寺へ程遠通路難儀ニ奉存候。依之本山役者中へ其旨趣御願申上候得者何分御許容無御座、私共愚案之取計ひ難成候ニ付、先達而御手前様迄其入口御内意申上候。然レ共御本山方丈峨山ニ御座候得者、御帰寺七月下旬なうてハ何分にも相決しかた、左様に彼是日数及延引、且那共之内急用寺役出来之時勿論、盆中法事一切相決不申、迷惑仕候処、今日中江村隣松庵小島丹治殿御取贖を以、双方違論ハ御預り相成、自今申分無之様相濟、村寺役少も無滞処隣松庵御引請、和談ニ罷成り申候。是迄私共心得違ニ而、何角と申御手前様へ御苦勞掛ケ申候。以後且那寺之儀ニ付、間違無之様念入可申候。右申上度書付奉指上候。以上

徳寿庵且那

惣代 藤左衛門^①

勘次 郎^②

宝曆四戌年七月十一日

岡本源治様

二、宝曆七年七月 梶井宮役人中宛徳寿庵檀那等連判詫状（山国村比賀江 岡本久夫氏文書）

奉差上一札之事

一、私共宿坊徳寿庵儀者

御本所様御料之内、御年貢地ニ御座候ニ付、右庵室住持交代之節、其訳御役人中様迄御届ケ御窺可申上筈ニ御座候処、此度住持退庵被致候得共、一言之訴も不申上候ニ付、今日御答メ被遊、申披相立かたく候。右不届之義者、前々も有之、何角申分及騒動候節、被仰付候儀を不相用、此度も御伺ひ不申上奉誤入候。自今右徳寿庵御取斗之訳ニ付、如何様之筋被仰付候共、違背仕間敷候間、此度之不届御免被下度、達而御願申上候処、御聞届被為成下、難有

仕合ニ奉存候。仍而此後御取斗ひニ付、一言も妨申間敷候。一札奉指上候。以上

宝曆七年丑七月 日

徳寿庵旦那

梶井宮様
御役人中様

- 文之丞印
- 若之助印
- 文六印
- 平兵衛印
- 源六印
- 源兵衛印
- 長兵衛印
- 喜八郎印
- 藤左衛門印
- 小左衛門印
- 庄兵衛印
- 嘉右衛門印
- 利兵衛印
- 勘次郎印
- 六兵衛印
- 伊兵衛印
- 嘉七
- 代治兵衛印

江戸時代村落の両墓制史料

二二、宝曆十一年五月 修驗大善院目安状案

乍恐奉願上口上書

一、私儀ハ生国丹波桑田郡山国比賀江村ニ而杉浦出雲守殿知行所ニ罷在候処ニ、私親共儀者修驗行者相勤来候。私儀も其職を受統、則三宝院御門主末派ニ而、當時在京仕罷有候得共、親共之遺跡相統之儀、庄左衛門と申者相統仕リ百姓相勤申候。然ル処村方ニ於而由緒御座候ニ付、村中一統とハ格別、先祖代々墓所も別所ニ御座候。此儀を村方之内相巧ミ□相妬、此度傍若無人之儀申掛ケ、則右墓所ニ往古より生立候印之木を伐り取り、親共之石碑者取捨可申之趣申掛候ニ付、此儀不得其意、承り合候処ニ、梶井宮御門主御末寺最玄寺旦那一統之所為と相聞候ニ付、多勢ニ無勢、内分之相對ニ而ハ相濟不申、依之恐多奉存候得共、御訴訟申上候。

三宝院御門主末流

願主 大 善 院

梶井宮御門主百姓

最玄寺旦那

相手 忠 藏

甚 七
嘉 兵 衛
半 兵 衛
善 四 郎
忠 七

源 兵衛

善 七

惣 七

次郎右衛門

清 五郎

五 七郎

五 兵衛

惣左衛門

長 四郎

十 次郎

由右衛門

源右衛門

介 八

庄や 藤左衛門

右之外旦那中

右相手者共より私墓所之木を伐り取り候ニ付、如何之訳と最玄寺住寺方江相尋候処ニ、当住被申候ハ、右墓所之辺ハ最玄寺古屋敷ニ而、則梶井宮様御除地之所、最玄寺旦那心儘之地所杯と無駄之儀申掛ケ、迷惑至極奉存候。私儀ハ黄檗宗禪定庵旦那ニ而御座候も、最玄寺古屋敷辺墓所御座候儀者由緒有之て之儀ニ御座候処、最玄寺旦那古之義曾而不存申、当時梶井宮御威光ヲ以而かさ押ニ仕候物工と相聞候。右墓所ハ天福年中より相伝り、則其辺ニ最玄寺と申を建

立仕候義へ、私先祖心願ニ而寺庵を相構、尤住持職も代々私先祖肉縁之僧相勤候。然ル処ニ永祿年中、明智日向守周山ニ城廓被相立候節ニ、右寺を引崩し退転ニ及候得共、墓所者代々葬り来り、仍之故障も無之此節迄之儀御座候。右退転之寺号を以テ村中立会之場所、字ハがんと山と申処ニ村中一統之墓所御座候ニ付、其辺へ村中より小屋取膳、則私共先祖之寺庵之名を以而最玄寺と号し、惣村中念仏寺ニ相用申候処、山国郷中常照寺末派十七ヶ寺有之候処、旦那葬送之儀ニ付異論有之候節、右之旨不得心之且那共申合、俄ニ最玄寺旦那ニ罷成候得共、無本寺之寺故新ニ梶井御門主御末寺ニ罷成候。右村方田畑高三百石梶井宮御領地被為有候節者寛文年中之比ニ而、其比右最玄寺へ御末寺ニ而も無御座、村中立会之念仏寺ニ紛無御座候。御末寺ニ罷成候義へ元禄年中之義ニ而、左候へハ梶井御門主御家領之内ニ最玄寺寺地并ニ古屋敷を梶井様御除地杯と、旦那共申候儀大キなる偽ニ御座候。私墓所之儀ハ五百年余も相続キ候儀、比賀江村之内高三百石御門主様御家領ニ相成候ハ九十年以来之儀、且又最玄寺由緒之儀、彼是以入組候訳、村方之者乍存シ、横道申掛候儀、一向年曆由緒不相分候而申掛候義難渋之程迷惑仕候。比賀江村之候ハ御分地ニ而、御門主様御領と、杉浦出雲守殿御知行と百姓入り雜り、尤山林芝原馬草場空地等ハ双方立会之場所ニ紛無御座候。別而墓所者往古向寄家々之墓所相定候儀、同郷八ヶ村之内ニも御座候儀、相違無御座候。御門主様御除地杯と申儀迹方も無之偽りニ御座候間、最玄寺旦那被召出候而、私先祖墓印之木伐り取候訳、以御慈悲御吟味被為成下、此後故障不申出候様ニ被為仰付下者難有奉存候。

宝曆十一年巳五月

二三、(推定)宝曆十一年五月頃 大善院目安ニ付論人等口上書案

口 上 覚

一、大善院目安差上候ニ付御尋之趣承知仕候。則書付ヲ以申上候。

一、宮様御領分ニ 平左衛門と申小百姓伴仁右衛門其子嘉右衛門只今百姓仕罷在候。平左衛門弟長兵衛と申同

性御座候。

此兄弟之者共御未進夥敷引眞、御役人御中伊藤右近様御取立ニ御越被成候。其夜兄弟共ニ妻子引連夜逃仕候。平左衛門ハ京都江立退申候。弟長兵衛ハ同村之内杉浦御領江隠、其時より杉浦御領ノ百姓ニ罷在候。長兵衛粹を庄左衛門と申候。其悴、兄ヲ徳次郎、弟を三平と申候。此三平只今大善院と申候。

右平左衛門之義ハ御未進之分、村方より相濟シ候事を聞出し翌年御[宮]様へ罷出、段々婦参之願申上候処、御慈悲之上、村之内ニ可指置由被為仰付、無是非指置候処ニ、平左衛門死去後、入簪仁右衛門何之訳合不存候而、墓所ニ付我儘横道仕候節、村方より書付を以御願申上候処、御聞届ケ被成下、則仁右衛門誤証文奉指上候事悴嘉右衛門聞伝罷在候。則被為召出御聞可被下候。

右大善院と申者、幼年三平と申候。親ハ庄左衛門と申者ニ而、杉浦御領分百姓ニ而御座候得共、三拾ケ年以前ニ山伏ニ相成、在々江札入米貰ひ、因茲村方参会等不仕候事。

御地頭杉浦御役人中より山伏御指構被成候ニ付、廿ケ年以前ニ悴徳次郎と申者老人置、庄左衛門義ハ妻子を引連京都へ引越候。依之宗門帳面ニ庄左衛門名前無御座候義ハ、杉浦領庄屋方より慥ニ承候。大善院兄徳次郎高五升計所持之杉浦様百姓ニ而御座候。

一、宮様御領分百姓嘉右衛門と申者、大善院親類本家ニ而御座候。先祖之義ハ右嘉衛門被為召出御聞可被下候。一、寺之義、御尋被成候最玄寺ハ古来より除地ニ紛無御座候。

御公儀様除地御改之節、毎度書付奉差上候外ニ式ケ寺御座候。何レ茂持庵ニ御座候得共、只今ニ而ハ二ケ寺ハ常照寺末寺ニ而御座候。

弟子
徳寿庵 右 最玄寺之隠居梅雲と申僧、此時より徳寿庵と改り申候。梅雲之弟子有之、此僧ハ京都相国寺江学問ニ

登リ京都ニ而死去仕候。夫より正度と申医者住宅被致、子共三人出生致候。成人之後黒田と申候所江引越申、

其跡江かい庵と申僧居申候。其後者厚宗と申僧被居候。享保十五年戌年徳壽庵ニ而死去被致、則寺内之山端ニ埋申候。

清光寺 本 俗家ニ而御座候処、小野内谷ニ寺号有之、慶□と申僧俗家を買取、寺ニ取立被申候。其次朴堂と申僧買得ニ而被致相続候。享保拾六年亥年致死去候而惣墓江取置申候。

右式ヶ寺ハ御領御年貢地ニ而御座候。

一、往古より最玄寺者御除地ニ紛無御座候。御除地最玄寺之古屋敷ニ住持墓御座候。平左衛門先祖折悪死去仕、村方江致延慮、時之住持ヲ頼、古來之住持墓ノ傍ニ密ニ夜深死骸ヲ埋申候。郷中一同之習ニ而、昼葬送致候事ニ御座候。其節者村方ニ寺と申ハ最玄寺一軒ニ而御座候。其後折節埋申候哉、平左衛門より嘉右衛門ニ至而昼ノ葬送不致候而、夜中ニ計葬候故、一向檀家ニ者存不申躰ニ而罷在候。

一、木ヲ伐候所ハ御除地続ニ而御座候得共、是ハ田地之畔と申而、庭^ま之頭ニ而御座候。田地之障ニ成候得ハ、草木共ニ統之田地主江伐苜取申候事ハ其辺ニも類多ク御座候。然ル所ニ大善院往古より墓所之印木杯と申物工ヲ以、此度御除地之内ハ恣新規ニ石塔建、我先祖より所持之地杯と申、御除地押領仕物工ニ御座候。伐取候木ハ廿年計生立申候。長サ式間余、本口指渡シ凡五寸、是ハ田地之陰ニ相成候間、村方より伐取申候。此義ハ一向他より指構之有之候所ニ而ハ無御座候事。

一、去ル三月、大善院密ニ参リ、新規ニ古屋敷之除地江石塔ヲ立候而帰リ申候ニ付、其儘難差置候故、本家嘉右衛門江申付、其方ノ欄塔江引取可申由申渡候。欄塔と申候ハ村中石塔置所ニ而御座候。則最玄寺山内ニ而御座候。此度大善院目安指上候物工致候義ハ不奉得其意候。本家嘉右衛門又ハ兄徳次郎ヲ指置、所ヲ立候候身分ニ而我儘致方、親庄左衛門義ハ墓所訖能存居申候故、是迄一言も横道ケ間敷事不申出候。徳次郎・庄左衛門本年死去仕候ニ付、此度大善院物工之義と奉存候。

二四、宝曆十一年六月 大善院宗門ニ付某人（比賀江村役人か）書状案

一、大善院宗門之儀者、代々黄檗宗禪定庵且那と申上候得共、右京都江引越候義者、禪定庵宗門凡廿ヶ年以來離檀、宗門帳相除候由承り、依之去年中親庄左衛門相果候節、千本蓮台寺坊中ニ死骸を取納、丁寧之葬送任候事相違無御座候。此旨杉浦領庄屋年寄何時ニても御尋可被下候。其節同道下仕候。

一、最玄寺御殿御末寺ニ相成候事へ、貞享元年甲子之年、凡当年まで七拾八年ニ相成申候。

一、大善院申上候者、最玄寺を持庵と申、代々肉縁僧を居へ置等と申上候得共、此義者無本寺之節者代々妙心寺僧、

次ニ大徳寺之僧院主被致候。其後、智恩院末派之僧竜山数年被致住職、宝永年中隱居、享保年中ニ被相果申候。其より代々住職者檀家共能存罷在候御事。

右之通相違無御座候 以上

宝曆十一年巳六月

二五、宝曆十一年九月 比賀江村両領和談濟状案（山国村中江 西八郎氏文書）

和談取贖証文之事

一、此度新井氏相伝之墓所立木を最玄寺檀家伐取、其上右之場所通行道筋ニ付故障出来、庄左衛門并弟大善院不得心、可及出訴処、拙僧共挨拶を以和談仕候事。

一、庄左衛門墓所ニ而伐取候木、挨拶人江貫ひ、最玄寺修覆ニ相用ひ候ニ付申分無之、此後墓所聊村中相妨無御座候。尤印之木耆本ニ限り可申候。其外者小木之内切払、田畑之日影ニ不相成候様ニ相心得可被申候。通り行道之義住宅之時節ニよって何方共不相定候得者、其時之向寄村中いつれ之道成共、通り可被申候。此外墓所右ニ淮し可申事。

一、同家嘉右衛門儀、先年妻相果候節、道筋ニ付故障有之候。此訳者同人祖父暫之間、家致中絶、帰村之御宿坊宗旨違之義有之候。此意味ニ而証文差出置候故、其訳を以嘉右衛門申分不相立、当春梓相果候砌、始而大野原江葬り申

候。然共此度和談之上者、此後嘉右衛門別之心得ニ而、兩樣勝手次第之事ニ候。先祖より村方江出置候古証文反古ニ相成候事。卯塔之儀同苗一家立合之儀、先規之通り村中同様ニ相談相勤可申候事。

右之通拙僧共挨拶任、下濟ニ相成り双方大悦ニ存候。然上ハ寛文六年享保九年之古証文通り、堂塔寺社其外何事ニよらず古來之通り相互ニ相談和熟ニ取斗ひ可申候。為後証如件。

宝曆十一年辛巳九月 日

杉浦出雲守様知行所

比賀江村

願主 庄左衛門印

同弟 大善院印

庄屋 仁右衛門印

年寄 武兵衛印

梶井御門主様御家領

同 村

庄屋 藤左衛門印

年寄 善七印

最玄寺旦那惣代

同 村 五右衛門印

甚右衛門印

嘉兵衛印

常照寺末寺

取贖人

清光寺[㊦]

東林寺[㊦]

二六、年次未詳 大善院悪行ニ付某人留書

(包感)

此内之書付ハ下之町新井嘉右衛門先祖最玄寺住持之情□ニて身隠し、其孫大善院トいふ山伏、最玄寺且家を相手取無^カ道申掛々、寺之古地を掠め候訳。大善院ハ其積悪が報じ跡亡び、嘉右衛門ハ大善院が悪運を續いで死人を送り、是も子孫不繁栄、自先祖新井之墓ならは一類不殘可送を、不葬事を以知るべし。

二七、安永六年六月 梶井宮役人宛禪定庵等三寺惣檀那連判詫状

乍恐奉指上口上書

一、当春二月下旬最玄寺住持全明法印遷化之節、最玄寺山ニ御葬被成候処、我々共了簡違ニ而新墓所之様ニ申成、杉浦領ニ加リ差留候様御本所様へ相聞、早速御答にも可被為仰付之処、御赦免被成下難有仕合ニ奉存候。其上最玄寺山ニ付、杉浦領百姓ニ致荷担、公事工ミ杯仕候覚、於我々共毛頭無御座候。若此上何事ニよらず杉浦領一同ニ荷担仕候ハ、如何様成ル越度ニ而も被為仰付可被下候。依而連判如件。

安永六丁酉年

禪定庵

徳寿庵

清光寺

六月五日

惣檀那中

平兵衛[㊦]

庄 治 郎 印
林 平 印
勝 右 衛 門 印
文 治 郎 印
平 三 郎 印
源 左 衛 門 印
栗 藏 印
吉 次 郎 印
善 右 衛 門 印
藤 右 衛 門 印
磯 七 印
伊 兵 衛 印
小 左 衛 門 印
長 右 衛 門 印
源 藏 印
義 右 衛 門 印
利 平 印
六 兵 衛 印
権 右 衛 門 印

右前書之通少も相違無御座候。若此以後最之寺境内之儀ニ付不法之族申者御座候ハ、私共罷出急度指止メ可申候。依而奥書如件。

和 平 印
 清 七 印
 源 七 印
 勘 七 印
 新 平 印
 嘉右衛門 印
 藤 七 印
 治 平 印

庄屋 義兵衛 印

年寄 忠七 印

役人 九郎右衛門 印
代前

徳寿庵檀那 文蔵 印

清光寺旦那 善七 印

藤左衛門 印

次郎右衛門 印

甚六 印

梶井宮様

御役人衆中様

江戸時代村落の両墓制史料

二八、(推定)安永六年六月 最玄寺住持埋葬ニ付済状案(後欠)

乍恐奉指上済証文

一、丹州桑田郡山国庄比賀江村最玄寺住持当春死去ニ付、卵塔場へ相葬候墓所之儀ニ付、及出入、杉浦出雲守殿御知行所百姓より、同村堀井宮様百姓を相手取、当六月九日御訴訟申上候ニ付、同月十六日、双方被召出、段々御吟味被仰付候而、双方へ絵図被仰付候ニ付、恐多奉存、下方ニ而内済仕度、暫ク御下ケ奉願、則城州下桂村材木屋惣兵衛・同下嵯峨材木屋源七并先達而差掛候山国庄中江村庄屋・同下村角左衛門相加、右四人以御挨拶を、此度内済仕候趣左之通ニ御座候。

一、当村住持寺葬之儀、此度和談之上、以来最玄寺へ勿論、清光寺右卵塔江相葬可申事。

一、禪定庵・徳寿庵式ヶ寺之儀者、寺内ニ墓地有之候ニ付、有来之通相葬可申事。

一、村方之儀者、双方共古来之通心得違無之様取計可申事。

右之通り証文為取替内済仕候。然上者以来双方相互ニ少し茂申分無御座、出入相済候ニ付、乍恐連判済証文奉差上候。右之段御聞濟……(竊紙剽欠)

二九、安永八年六月 最玄寺山争論日記

一、当山儀去ル^(安永6)酉年先住死去之砌及争論候而、則東役所赤井越前守殿へ罷出、同村杉浦領双方対決有之、段々御吟味之上、日数相掛、然所あい拶有之、和談下済有之、即済証文取替置候。然処此度又々六月廿五日ニ右卵塔場上林江猥ニ立入樹木を伐取荒し候。其節当寺院主病氣ニ而、先々暫差置、七月上旬漸少々快氣ニ而段々吟味いたし、弥杉浦領庄や平八・年寄五郎右衛門・百姓庄右衛門、右三人共伐荒し候故、此者共招寄院主対談有之、兎角去ル争論之節内済之上、立会場所或へ杉浦分ハ分もらい候約束いたし候杯申、品々無法申、何分狼藉之至候。然し兩三日之間返答急度相待事ニて、右返答次第ニ而御殿へ申上、兎角御思召次第御公儀へ出訴にもなるべし旨伝へ、何分益前ニ

もあり盆中寺役有之、尚又、伐荒し様子勘兵衛御殿江六月廿七日ニ申上候。御勘定所ニ而も甚以御立腹、弥村方何れも相談いたし出訴致旨承候而、勘兵衛掃村阿居院井つつやニ而次郎右衛門ニ出合、右之趣申候得者、次郎右衛門直ニ御殿参上いたし候而、七月廿日迄相談致し御殿□参旨承、掃村、其より岡本金吾御殿より御召院主、右境内之樹木伐荒し趣住職より不相濟、病中ながら御殿へ御届申上候。然ル処杉浦領一応の返答有之候へ、弥当院主より公儀江出訴被致旨承、尚又檀中へ勿論、一件ニ付三百石御下之百姓随分精出し、万々一不情不承知者共有之候へ、申上候様被仰付、右趣掃村之節檀中へ院住より申渡ス、百姓へ岡本より申渡有之候。其より訴状認、十八日ニ院主・忠七御殿へ上而、十九日ニ金吾・九郎右衛門上候。村方訴之儀杉浦百姓より延引を頼、然し御殿へ兩三度御届之上、如何難斗、弥廿二日公事之日ニ而廿一日帳付之日ニ至、当院主病氣再発いたし候へば、訴訟人病氣是非なく先訴訟へ来月相延し候。尤東御役所御番也。其故九郎右衛門・忠七先掃村、院主儀へ御殿ニ而養生、岡本金吾昇殿有之候。(後次)

三〇、安永八年九月 梶井宮役人宛比賀江村梶井領庄屋等願状

(包紙)

乍恐口上書

乍恐口上書

丹州桑田郡比賀江村
梶井高棟御末寺

最 玄 寺

一、当寺之儀者、従往古御末寺ニ而寺法之儀者勿論、境内并什物等ニ至迄前々より仕来之通相守可申旨被仰付置候。既ニ当寺先住去々酉年死去仕候。其節同村杉浦出雲守殿百姓共、当寺檀那を相手取、東御役所様江御訴詔申上候処、御聞掛相成、御吟味之上則絵図被仰付候処、先住死後之事故、当寺檀家之者共、和談内濟仕、村方之儀者従往古仕来之通相定、濟状奉指上候。然ル所拙僧儀、当六月上旬より大病ニ而前後不弁難儀之処を見込、同月廿五日杉浦出雲守殿百姓庄屋武兵衛・年寄五郎右衛門并庄右衛門右三人之者共、当寺境内江立入、猥樹木切荒無法我儘仕候。然レ共右申上候通、拙僧病惱難堪難渡之砌故、先其儘差置、漸七月上旬少々快氣仕候故、右相手之者共招寄、段々趣

意相尋候へ共、右相手之者共申候者、右場所先々より立会場故如斯致方ニ候と、不法之儀を申募候。尤右場所者当寺境内ニ而、樹木者勿論柴下草等迄、往古蒙御下知を支配任来候処、此度相手之者樹木切荒、先々より仕来り杯と不相当之儀を申紛し候得共、右場所へ当寺境内ニ而他より一向指構ひ無之、当寺支配相違無御座候。且又享保十六亥年当寺檀那共、寺入用之樹木切取候処、相殘候徳寿庵并清光寺と申候両寺之檀那共、立念山と申掛、依之右之趣御訴申上候処、古来段々御糺被成候而、右両寺檀那之者共過料被仰付候而、則過錢差出置候。其節之書付等も所持仕り罷在候。然ルを往古より仕来杯と申、此度猥ニ樹木切荒候段、何共拙僧申訳無御座、歎ヶハ敷奉存候間、何卒御慈悲之上、宜敷御取計ひ被成下候へ、難有可奉存候。以上

安永八年亥九月

丹州桑田郡比賀江村

御末寺

最 玄 寺[㊦]

庄屋

忠 七[㊦]

口年寄

檀家惣代

九郎右衛門[㊦]

梶井宮様

御役人中様

三一、安永八年九月 奉行所宛梶井領庄屋等訴状案

一、当寺之儀者、従往古梶井御門跡御末寺ニ而寺法ハ勿論境内并什物等ニ至迄、従往古仕来之通相守可申旨被仰付置候。既ニ当寺先住去々酉年病死仕候。其節同村杉浦出雲守殿百姓共当寺檀那を相手取、酉六月当御役所へ御訴訟申上候処、御聞掛ニ相成、御吟味之上徳^(トク)図被仰付候得共、先住死後之事故、当檀家之百姓此より付添願出候者共和談内濟仕、村方之儀者従往古仕来之通ニ相定、濟状奉指上候。然ル所拙僧儀、当六月上旬より大病ニ而、前後不弁難

義之処を見込、同月廿五日右相手之者共当寺境内へ立入、猥ニ樹木切荒、無法我儘仕候。然レ共右申上候通拙僧病
 悩難決之砌故、先之儘差置、漸七月上旬少々快気仕候故、右之者共招寄、段々趣意相尋候得者、相手之者共申候者、
 此度樹木伐取候場所者、立会場故右之通致など不法之儀を申募候。尤右場所者当寺境内ニ而、樹木者勿論柴下草等
 迄刈取候処、此度相手之者共樹木切荒、剩（六カ）從先々支来り杯と不相当之儀申紛候。尤右場所者当寺境内にて、百姓よ
 り差構ひ無之所ニ而御座候。且又享保十七年亥年当寺檀那共寺入用之樹木切取候処、相殘徳寿庵并清光寺と申候兩
 寺之旦那共、立会山と申、差障之義を申掛候ニ付、右之趣御本寺梶井宮様へ御届申上候処、段々古来仕来之儀御糺
 被成、兩寺檀那之者共過料被仰付、則過錢差出置候。然を往古より仕来杯と申、此度猥ニ樹木伐荒狼籍仕候段、御
 本寺へ対し、拙僧申訳無御座敷ケ敷奉存候。右御慈悲之上、右相手之者共被召出、從往古仕来之通、境内へ立入猥
 ニ樹木切荒狼籍不仕候様、被為仰付被下候ハ、難有可奉存候。以上

安永八亥年九月二日

梶井宮御家料

丹州桑田郡比賀江村

梶井御門跡御末寺

訴訟人 最 玄 寺

庄屋 忠 七

檀那惣代

年寄 九郎右衛門

同国同郡同村

杉浦出雲守殿御知行所

庄屋 武 兵 衛

御奉行様

年寄 五郎右衛門
百姓惣代 庄右衛門

三二、(推定)安永八年 梶井宮宛最玄寺住持訴狀稿本(後欠)

(細字は行間に書込の
細書。本文と同筆)

杉浦出雲守殿知行所

庄屋 武兵衛
年寄 五右衛門
百姓惣代 庄右衛門

当寺之儀へ

庄屋忠七
年寄九郎右衛門

一、丹州桑田郡山国庄比賀江村最玄寺儀、従古来、梶井宮御末寺ニ而、寺法者勿論境内并什物等ニ至迄先々より仕来

之通相守可申旨被仰付置候。右最玄寺住持、去ル酉年死去仕、去ル戌年九月拙僧ニ任職被仰付候儀ニ御座候。一昨

酉之年先住死去之砌、同村杉浦出雲守殿百姓、当寺檀那を相手取、及争論、当御役所様ニおゐて段々御吟味被成下

候処、御聞掛ニ相成、其砌以取暖双方和談内濟仕、互ニ濟証文為取替相濟申候儀ニ御座候。然ル処、此度拙僧儀、

(安永)当六月之上旬より大病ニ而前後不弁難儀之處を見込、右杉浦領百姓、六月廿六日ニ当寺境内江狼ニ立入、樹木を伐

倒無法我儘仕候。然共右申上候通り、拙僧病悩難堪難渋之砌故、先暫其儘ニ而差置、漸当月上旬少々快氣仕候故、

右之者共招寄、段々趣意を相尋吟味仕候得者、品々無法之族申募難儀迷惑仕候。右場所儀者、尤右相手之

相手之者申候へ、前々より右場所へ立合場所故右之通致方等と

古来より当時所持ニ相違無之、御本寺梶井宮様より任職交替之節へ、右場所先々より本寺所持之旨被仰渡、勿論是迄樹木等狼ニ

者共、明塔最玄寺境内ニ御座候へ者、誠ニ先祖之墓跡ニ御座候。当時者出雲守殿御知行所之内ニ在之候寺院を夫々

伐荒候儀無御座候。且又当寺右場所之儀、古来御除地ニ而則享保十七子年五月寺社御改之節迄御除地之訳書上候処、其後御改之

の檀那寺ニ頼居候事ニ御座候間、右信向之寺院へ右之墓跡引取具候様仕度候。元他檀那墓跡を当寺中為差置候故、

節、無任又ハ庄屋役のもの心得違ニ而、寺社御致之節相洩候様承リ云申候。右之仕合ニ御座候ヘハ、当寺境内ニ相違無之候処、右鉢村方混乱之基ひと相成候。且者新法我儘を相働候事ニ奉存候間、彼者共之卵塔、銘々之信向之寺院江引取、以此度狼ニ樹木を伐取狼籍仕候段、御本寺宮様ニ対し無申訳、欺ケ敷奉存候間、何卒右相手之者共被召出、古来より仕来之通、当来我儘狼籍之義不仕候様、御慈悲之上、相手之者共被召仰付下候ヘ、難有奉存候。寺境内ニ而狼ニ狼籍我儘不仕候様被為仰付下候ヘ、難有可奉致候。

三三、天明元年十二月 最玄寺祠堂銀預状（山国村比賀江 岡本久夫氏文書）

預り申銀子之事

一、祠堂銀子百五拾目

右之銀子儘ニ預り申処実正也。但シ返濟之儀ハ来寅十月ニ急度返濟可申候。仍而為後日預証文如件。

最玄寺現住

預主 樹光院^印

請人

内藤太郎^印

天明元丑年十二月廿五日

岡本金吾殿

三四、天保十二年七月 大野村円徳寺宛梶井宮役人等書状案（比賀江 区有文書）

以手紙得御意候。然ハ当御殿御領比賀江村百姓金五郎義、去ル七月十五日申刻不慮之死去ニ而村役人届出、則□之取調候様全乱心ニ相違無之趣ニ付、同所最玄寺へ葬送申付候。併當時無住ニ付、其御方兼帶旦と有之候事故、宜御取斗有之候様致度候。為念此段為可申入、如斯御座候。以上

天保十二年丑七月十七日

梶井御殿

井上近江介

飛田石見

當時

最玄寺

兼帯

大野村

円徳寺

御房

庄や

年寄

前田彦兵衛
新井安兵衛

三五、天保十三年十一月 最玄寺檀那中宛神宮寺寺請状

法請之事

一、此敬道与申僧、拙寺弟子分ニ有之候処、機縁相応、今般其御村檀寺最玄寺江住職預り御吹挙候。然ル上者朝暮勤行無怠慢為致可申候。且又自然不帰依等之節者、出院為致可申候。本尊在殿什具等迄茂万一紛失之節者、遂吟味可申候。仍而法請如件。

天保十三壬寅年

十一月 日

神宮寺

豪 湛 (花押)

最玄寺

檀那衆中

三六、嘉永四年十一月 庄屋役人中宛念仏講惣代診状 (山国村比賀江 岡本純一氏文書)

口上ヲ以申上候

一、当念仏講之儀者、例年八月十五日ニ於村方惣堂ニ相勤罷在候処、当年之儀者講中之内、他行之者共多分有之、不計延引ニ付、今日講中相揃申候ニ付、念仏相勤申度義御村方江相願申上候所、不時念仏恒例之通可相勤候所、是迄

延引致候段、不信心之趣蒙御差^{マカ}当恐入候。然上ハ急度例年通り定月日ニ講中申合相勤可申候間、此段一統書付ヲ以御断申上候。以上

嘉永四年亥十一月十六日

当村念仏講

惣代

金

七圓

御庄屋

五右衛門圓

役人中様

(完)